“A Psychology which Accords so Extensive and so Handsome a Place to Sensibility” (2) : A Study of the Bergsonian Notion of <Sensibility> in his Later Years

Ryu MURAKAMI

In another paper I pointed out that Henri Bergson (1859-1941), a French philosopher, in his early years argues on <sensibility> from a similar viewpoint to his contemporaries’. In this paper I aim to examine his notion of <sensibility> in his later years, focusing on *The Two Sources of Morality and Religion* (1932).

Although rarely pointed out, in *The Two Sources* Bergson argues on <sensibility> from his particular point of view. He proposes “a psychology which accords so extensive and so handsome a place to sensibility,” where emotion gains an advantage over intellect and volition.

When we compare *The Two Sources* with *Technical and Critical Vocabulary of the Philosophy*, a French encyclopedia published in 1926, we see that Bergson has his conception in common with his contemporaries to some extent, but that on the other hand he is outstanding among contemporaries especially for his paying attention to the <superior component> of <sensibility>, which is characterized by activity and unity, in contrast to the <inferior component>, which is characterized by passivity and multiplicity.

「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」（2）

―― 晩期ベルクソン哲学における「感性」概念 ――

村　上　　龍

２．知性の働き

以下では、ベルクソンの「感性」概念の独自な側面、すなわち、「知性－以上の」成分について、ひきつづき考察をすすめよう[1]。既述のとおり、「感性」がすくなくともその一半において、未展開の可能性を受容する能力であり、またそれと同時に、あるいはそれゆえにこそ、知性に働きかける能力でもあるのだとすれば、そのさい知性はいかにしてこの可能性を実現へと導くのか。知性はどのような仕方で、「知性－以上の」情緒的状態を観念やイメージへと展開するのだろうか。

この点をめぐっても、議論はもっぱら芸術的もしくは文学的な創作の場面にそくして展開されているから、我々としても、ひきつづきベルクソンの芸術論、文学論に耳を傾けたい[2]。

２－１．統一から多性への分散

「文筆の仕事に携わった者ならだれでも、ひとり放っておかれた知性と［…］独自の二つとない情動の火によって焼きつくされたそれ［知性］との違いを、確認することができたはずである」とベルクソンは言う。彼によれば、前者の場合、すなわち、知性が「独自の二つとない情動の火によって焼きつくされ」ていない場合には、文筆の仕事は、既成の「諸概念」、ならびに、これと対応

---

[1] 本稿は、拙稿「「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」（1）――晩期ベルクソン哲学における「感性」概念――」（『山口大学哲学研究』、26巻、2019年、1-18頁）の続編である。

[2] これからみるように、ここでもやはり、「情動」という用語がとくに用いられている。この点については、既出の拙稿「「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」（1）」を併せて参照されたい。

する「諸々の語」を「組み合わせる」ことによってすすめられる。そして、その結果として手にはいるのは、「既存の配列をあらたに組みかえただけ」のものでしかない（D.S. 43 : 1013-1014）。

これにたいして、後者の場合、すなわち、「知性－以上の」「情動」が介在する場合について、ベルクソンは次のように述べる。

> それ［書き手の精神］はもはや、すっかり出来あがった多なる諸要素から出発して、既存の配列をあらたに組みかえただけの、寄せあつめ的な統一に到達するのではない。精神は、一にして二つとない（unique）ようにみえるもののところへ一挙に身を移したのであり、そのあとでこれが、あらかじめ諸々の語のなかにあたえられている多数の一般的な概念に、どうにか広がってゆこうとするだろう（D.S. 44 : 1014）。

ここでは、あるべき創作の手順が、一と多の対概念をつうじて、他方の手順と対比的に語られている。自らの知性が「情動」によって裏うちされたとき、書き手はもはや「すっかり出来あがった多なる諸要素」を「寄せあつめ的な統一」として配列しなおすのでなしに、「一にして二つとない」ものを多数の観念、語へ展開するのだとベルクソンは言う。

ここで言われる「一にして二つとない」ものとは、「情動」それ自体を指すと考えてよいだろう[3]。してみると、「知性－以上の」情緒的状態から表象ないしイメージへの展開は、多なるものから一なるものへ移行することと対比的に、あるいは、けっきょくのところ多なるものに終始してしまうことと対比的に、一性から多性への移行として定式化されるわけである[4]。「感性」の受容した可能性を実現へと導くのにさいして、知性がこのように統一から多性への分散によって事をはこぶのだとすれば、これまでにみてきた引用文のなかで、ベルクソンが一方で「知性－以上の」「情動」に「不可分な」という形容詞を付し[5]、また他方で、そこから展開される観念やイメージなどの表象をかならず複数形で記していたのも[6]、当然である。

---

[3] 本節１－３．でみた複数の引用文のなかで、ベルクソンは「知性－以上の」「情動」と自らの呼ぶものに、「二つとない（unique）」という形容詞を付していた。

[4] ベルクソン哲学における、統一から多性への分散の構図に注目した研究としては、以下のものがある。Georges Mourélos, *Bergson et les niveaux de réalité*, P.U.F., 1964.

[5] 本節１－３－１．でみた引用文を参照されたい。

[6] 本節１－２．でみた引用文を参照されたい。

だが、上記の分散の構図にかんしては、なお補足せねばならない点がある。第一に、なぜ、あるいはいかなる意味で、「知性－以上の」情緒的状態は統一的であるとされるのか。そこから展開される諸表象が多性にあずかるにもかかわらず、それらを潜在的に含んだ心的事象が一なるものでありうるのはいかにしてか。そして第二に、統一からの分散をへて形成されたもの、たとえば、天才的な芸術作品[7]はなぜ、「ひとり放っておかれた知性」による産物とは異なって、「既存の配列を」「組みかえただけの」「寄せあつめ的な統一」に堕すことがないのだろうか。上でみた引用文のなかでベルクソン自身も論及するとおり、多なるものから一なるものへ移行する場合と同様に、あるいは、多性にはじまり多性におわる場合と同様に、一性より発する多性もけっきょくは既成の観念ないし語に落ちつかざるをえないのだとすれば、それが非凡な性格を帯びるのはいかにしてか。

２－２．「知的努力」

まずは、上で第一のと呼んでおいた論点、すなわち、「知性－以上の」情緒的状態が一性によって規定されることについて、理解を深めるべく考察をすすめる。とはいえ、『二源泉』のなかには、この点にかかわる記述が見あたらない。そこで、我々としては、論集『精神のエネルギー』（1919年）に所収の論文「知的努力」（1902年）に手がかりをもとめたい。なぜならば、ベルクソンはこの論考のなかで、「感性」との連携にはふれないまでも、いみじくも統一から多性への分散の構図にそくして、知性的な努力の諸相を論じているからである。

２－２－１．ピラミッドの頂点から底面への下降

論文「知的努力」の目的は、知性の働き一般を定式化することにある。この目的にさいして、ベルクソンはさいしょに、そこで得られた知見を他の局面にも応用すべく、「知性の仕事」のうちで「もっとも容易」なものと彼の考える「想起」に議論の糸口をもとめる（E.S. 155 : 932）。

記憶術の指南書をいくつか検討するなかで、それらが共通して指示するところをつきとめたベルクソンは、次のように述べる。

[7] 先にみたように、ベルクソンは「二つとない情動から生まれた」芸術作品を「天才的」と形容している。本節１－３－１．を参照されたい。

「記憶術にたけた者の才能は、ひとまとまりの文章のなかで、すべての頁をひき連れてくるような際だった観念、短い文句、単純な語を捉えることにある」。ある概説書にはこのように書かれている。[…] 多数のイメージがただ一つの、単純で分割されざる表象に凝縮されるように思われる、そうした点へ身を移すわけである。[…] そして、想起すべき時がきたら、ピラミッドの頂点から底面へとふたたび降ってゆくだろう。すべてが一つの表象のうちにまとめられていた高次の（supérieur）平面から、しだいに低い平面へ移行するのであり […] それにともなって、単純な表象は分散して諸々のイメージとなり、それらイメージが文句や語に発展してゆくだろう（E.S. 160 : 935-936）。

ここでは、一般に流布する記憶術のハウツーが、ベルクソン特有の諸概念によりあらためて解釈されている。「すべての頁をひき連れてくるような際だった観念」を捉えよという指南書の指示は、「多数のイメージ」を「ただ一つの、単純で分割されざる表象に凝縮」することの推奨に他ならない。とすれば反対に、想起とは、「ピラミッドの頂点から底面へ」下降すること、「すべてが一つの表象のうちにまとめられてい」る「高次の」一点から「諸々のイメージ」を「分散」させること、これに尽きるだろうとベルクソンは言うのである[8]。

ベルクソンはこのように、想起というもっとも容易な知性の仕事を、すべての要素が凝縮された高次の表象、単純で不可分なこの一性から、多性へと降ることとして定式化する。そして彼は、いわばピラミッドの頂点を成すその一なる表象を、「ギリシア語を援用して[9]」「力動的図式[10]（*schéma dynamique*）」と

[8] なお、ここで言われるピラミッドと、第二主著『物質と記憶』（1896年）に登場する、いわゆる記憶の逆円錐とのあいだの関連性を考察した研究としては、年代順に以下のものがある。Deleuze, *Le bergsonisme*, P.U.F., 1966.（ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳、法政大学出版局、1974年。）瀧一郎「努力の機構（メカニズム）――ベルクソンにおける「運動図式」と「力動的図式」――」、『美学芸術学研究』、10号、1991年、163-185頁。

[9] 佐々木健一は、ここでギリシア語に訴えるベルクソンの意図について、ふた通り、あるいは三通りの可能性を示唆している。佐々木の推察するところでは、dynamique という形容詞にはとくに、「高価値の」ないし「潜勢態の」、もしくはその両方の意味がこめられている（佐々木健一『美学辞典』、東京大学出版会、1995年、75頁）。じっさい、本文中でみたとおり、一方で、ベルクソンは力動的図式を「高次の」と形容しているし、他方でこの図式は、やがて想起されるべき諸々のイメージを内に含むとされるのである

名づける（E.S. 186 : 936-937）。

２－２－２．渾然たる相互浸透による一性

上述のように、想起の努力がピラミッドの頂点より底辺への下降として定式化されるものとして、それでは、この頂点はなぜ、あるいはいかなる意味で、一性にあずかるのだろうか。やがて底面にむかって分散しゆく諸要素が一点に凝縮されているという事態を、我々はどのように理解したらよいのか。

この点について、ベルクソンは自らの実体験を例にとって論じている。この「知的努力」という論考の準備をすすめていたとき、彼は「参照すべき文献のリスト」を作成しようとして、そのうちの一冊の著者である「プレンダーガスト」の名前をただちには思いだせなかったのだという（E.S. 164 : 939）。このときの体験をふりかえり、ベルクソンは次のように言う。

> 私は残されていた全般的な印象から出発した。［…］粗暴さや強奪につながる主要な調子のごときものがあったのだが、それは、猛禽が獲物に襲いかかり、爪でつかんで連れさってゆくのを見る機会があればそのさいにわき起こるであろう、そのような感情であった。いまになって思えば、とる（*prendre*）という、探していた名前のさいしょの二音節によって大方をつづることのできる語が、私の印象のなかに大きくはいり込んだのにちがいないし［…］また、「プレンダーガスト（Prendergaste）」のことを考えるとき、「アルボガスト（Arbogaste）」の名前が現在これほど執拗に私の心の内に現れることからすれば、とるという一般的な観念とアルボガストの名前とを、私は一つに溶かしてしまっていたのではないだろうか。というのも、ローマの歴史をならったときから頭に残っている後者の名前は、私の記憶のなかで、粗暴さにかかわる漠然とした諸々のイメージを喚起するものだったからである（E.S. 164-165 : 939）。

から、佐々木の説はきわめて有力であると言ってよい。

[10] なお、ベルクソンは『物質と記憶』において、これに類似した「運動的図式（schème moteur）」という概念を提出している。二つの概念のあいだの関連性にかかわる研究には、年代順に以下のものがある。Gabriel Madinier, *Conscience et Mouvement, Nauwelaerts*, 1967（1938[1re]）. Deleuze, *op.cit.* 瀧、前掲論文。

ここでは、かろうじて残されていた「感情[11]」のなりたちが、推察をまじえて詳細に語られている。そこには「粗暴さや強奪につながる主要な調子」があったというのだが、ベルクソンのみるところでは、それはこの「感情」が、「とる（prendre）」という観念と、古代ローマ時代の武将「アルボガスト（Arbogaste）」の名前から彼がきまって連想する「粗暴さにかかわる」「諸々のイメージ」とを、「一つに溶か」すことによって形成されたものだからである。つまり、「プレンダーガスト（Prendergaste）」という、想起すべき文字群の前半部分と後半部分とにあたる、prenderならびにgasteが、いまだ判然と想起されない段階において、各々に関連する観念やイメージをひき連れて相互に溶けあったもの、それこそが、このときのベルクソンにとっての「力動的図式」だったというわけである。

このように、ベルクソンは「力動的図式」のあずかる一性を、やがて「相互に外在的な諸部分に発展」するだろう諸要素の「相互浸透」によって（E.S. 164 : 938）、あるいはさらに、相互に外在化されたあとのそれら諸要素が「判明な（distincts）」（E.S. 166 : 940）と形容されることに鑑みるならば、伝統的な対概念をふまえ、渾然たる（confuse）という形容詞を付すこともできよう相互浸透によって[12]、特徴づける。そしてベルクソンは、未形成の諸要素を相互浸透により一体化させたこの表象を、たんなる「抜粋」や「要約」とは異なってすべての要素を内に含んでいるという点で（*ibid.*）、「抽象的で乾いた、空虚な統一」ならぬ「生命の統一そのもの」（E.S. 186 : 956）であるとする。

ここまでみてきたように、論文「知的努力」において、単純で不可分な表象を意味する「力動的図式」という概念を提出するベルクソンは、この表象のあずかる一性を、やがて判明に、すなわち相互に外在的になるであろう諸々の観念、イメージが未形成のうちに渾然と相互浸透する、生命体のそれにも比すべき統一として規定する。そして、想起をはじめとする知性の働き全般を、頂点

---

[11] ここでは、「力動的図式」に相当するものに「感情」の語があてられている。のちの『二源泉』においてであれば、ベルクソンはかならずや、これに「知性－以上の」という形容詞を付したことだろう。しかしながら、論文「知的努力」においては、「知性－以上の」情緒的状態と「知性－以下の」それとは、とくに区別されていない。

[12] なお、ベルクソンは論文「知的努力」で、「明晰性」ならびに「判明性」を以下のごとくに定義している。「ある表象は、より多くの細部が見いだされるほどに明晰となり、また、孤立させられ、他のすべての表象からいっそう区別されるにしたがって判明になる」（E.S. 184 : 955）。

と底面をそなえたピラミッドにもなぞらえながら、高次の一性より低次の多性への下降として定式化するのである[13]。

なるほど、のちの『二源泉』におけるのとは異なり、ベルクソンはここで、知性の働きを論じるのにさいして、「感性」との連携についてはいっさい顧慮しておらず、それゆえにまた、ここで言われる「力動的図式」は端的に知性的な表象でしかない。とはいえ、高次の一性から低次の多性への分散の構図にそくして知性の働きを定式化し、しかもそのさい、一性を未形成の諸要素から成るものとして、多性を出来あがったおなじ諸要素から成るものとして、それぞれ規定する視座は、『二源泉』におけるのと同一のものとみてよいだろう[14]。だとすれば、『二源泉』の検討にさいしてゆきあたった問題、すなわち、「知性－以上の」情緒的状態の一性の問題についても、我々はこれを、やはり上記のごとき渾然たる相互浸透によるものとして理解することができる。「感性」をつうじて受けとられた潜在的な諸表象は、未形成であるがゆえに渾然と浸透しあっており、だからこそ知性が、判明な多性への発展によってこの可能性を実現へと至らしめるのである。

２－３．二つとない独自性の反響

次いで、先に第二のと呼んでおいた論点[15]、すなわち、高次の一性が分散することで生じた多性が非凡な性格を帯びることについて、理解を深めるべく考

---

[13] なお、ベルクソンは知性の働きを、ひたすら単線的なものとして捉えているわけではない。思いだすべき事柄が定まっている想起の場合でさえ、我々はしばしば試行錯誤の末にもとめる成果へ達するし、ましてや、いまだ存在せざるものをあらたに生みだす発明や創作など、いっそう「困難な」(E.S. 155 : 932) 知性的努力の場合にはなおさらであろう。ベルクソンはそのような試行錯誤を、「図式と諸々のイメージとのあいだの上下運動」(E.S. 182 : 953) という言葉で説明し、「イメージが図式のほうへ戻ってきてこれを修正する」ことも往々にしてあると言う (E.S. 176 : 948)。とはいえ、ベルクソンにとって、知性の仕事がすすめられる基本的な方向は、あくまでピラミッドの頂点から底面への下降である。

[14] すでにみたとおり、『二源泉』において、「知性－以上の」情緒的状態は諸々の表象を潜在的にはらむとされていたし、また、とくに本節１－２．でみたように、ベルクソンは、「知性－以上の」情緒的状態が、そこから産まれる観念、イメージにたいして「価値のうえで高次であること」にも言及していた。

[15] 本節２－１．を参照されたい。

をすすめる。たとえば、「知性－以上の」「情動」から生まれた天才的な作品もまた、けっきょくは既成の観念、語によって織りなされるしかないとすれば、それはなぜ凡庸であることを免れうるのか。

この点にかんしては、以下の記述を参照したい。

> 彼［文筆の仕事に携わる者］は、単純な情動を探しにゆき［…］これを携えて既成の諸観念、すでに存する諸々の語を出迎えようとするだろう［。…］その途上で、情動がそれ自身より発する諸々の記号となって表現されるのを、彼は感じるだろう［。…］それら要素は、それぞれがその種のものとしては二つとないものであるから、いかにしたらこれを、ある事物をすでに表現している諸々の語と合致させることができようか。そのためには語のほうを撓めなければならないだろう［。…］それでもなお、彼が成功の保証を得ることはけっしてないだろう（D.S. 269-270 : 1191）［。］

ここでは、「知性－以上の」情動を諸観念へ、そしてまた、これと対応する諸々の語へと展開する段で、文学者が直面するであろう産みの苦しみについて語られている。形成の進展におうじて、「単純な情動」のうちでの渾然たる相互浸透からはなれ、相互に外在化する諸々の表象は、「情動」がそうである[16]のと同様に「それぞれがその種のものとしては二つとないものである」から、これらに既成の観念もしくは語を首尾よくあてはめることはできない。そのため文学者は、おそらくは通常にはない用語法を採用し、通常ではありえない仕方で語のあいだを接続するなどして、「語のほうを撓め」ることを強いられるのだとベルクソンは言うのである。

事の次第がそのようであるとしたら、我々は次のように考えることができよう。ようするに、「感性」が受けとった可能性はいまだかつて実現されたことのないものであるから、たとえ既成の観念、語をあてがわれたとしても、かならずやこれらにあたらしい色あいをあたえることになる。言うなれば、ピラミッドの頂点を彩る二つとない独自性が底面の多性にまで反響する。ベルクソンが別の個所で用いる比喩を転用するならば、それは、「あたらしい楽器」が奏でる「独特の音色」のなかで、しかしながら、「基音」は「以前から存する諸々の楽音」を「倍音として利用している」のにすぎないかのごとくなのである（D.S.

[16] 本節１－３．でみたように、「知性－以上」の「情動」はしばしば、二つとない（unique）という形容詞をともなっていた。

38 : 1010)。

２－４．多性の複数可能性

上述のように、高次の一性の二つとない（unique）性格が低次の多性にまで反響するものだとして、しかしながらそれは、ありうべき多性がただ一つである（unique）ことを意味するわけではない。むしろ、ベルクソンにしたがうかぎり、統一から多性への分散によって事をはこぶのにさいして、知性はピラミッドの頂点に複数の底面をあてがいうると言わなければならない。我々はさいごにこの点を確認して、芸術論的もしくは文学論的な記述の検討を締めくくろう。

先にもみたとおり、「知性－以上の」情緒的状態が特定の「創造の要求」を含みもつことをベルクソンは主張し、したがって、たとえば芸術家や文学者のやどす「情動」も、一定の作品の実現を待ってようやく満足させられるものとされていた[17]。ただし、ベルクソンによれば、ある「情動」を満足させる芸術作品ないし文学作品は、かならずしも一つではない。彼は、「情動」が文学者にたいして「特定の」「創造の要求」を突きつけることに言及するくだりで、それにひき続いて以下のように述べている。

> それ［文学者の魂のうちに生じた情動］は創造の要求でしかなかったが、ただし、それは特定の要求であったために、ひとたび実現された当の作品によってようやく満たされるに至ったのであり、かりに別の作品によって満足させられることがあったとしたら、その別の作品は、実現された当の作品とのあいだに内的な深い相似性を有しているのでなくてはならなかっただろう。ここで言う相似性とは、一つのおなじ音楽が諸々の観念やイメージへと、ひとしく悪くない仕方でふた通りに翻訳された場合に、その二者のあいだに存するそれにも比せられよう相似性のことである（D.S. 44 : 1014）。

ここでは、ある一定の作品に結実した「創造の要求」が、しかしながら、「別の作品」によっても「満足させられ」えたであろうことが語られている。たとえば、ある楽曲にかんする複数の批評や解説が、それぞれに異なる観念やイメージによって、「ひとしく悪くない仕方で」もとの楽曲を「翻訳」している場合がある。それと同様に、文学者をつき動かす「知性－以上の」「情動」もまた、

[17] 本節１－３－１．を参照されたい。

現に実現された作品におけるのとは異なる観念、語によって表現されることもできたであろうとベルクソンは言うのである。

このようにベルクソンは、「知性－以上の」情緒的状態が、観念ないしイメージの複数の組み合わせへと発展しうることを主張する。「感性」に働きかけられた知性が一なるものの分散によって形成する多性は、いわばそれ自体もまた多的でありうるのである。裏をかえすならば、それは、「感性」をつうじて受容された可能性が、ひと通りの仕方では汲みつくせない豊かさを湛えているということである。

我々はここまで、知性が「感性」の働きかけをうけて、「知性－以上の」情緒的状態を観念やイメージへ展開する局面についてベルクソンの論じるところを、関連する他の論考も参照しながら、追ってきた。

「感性」をつうじて受けとられる、いまだ実現されることのなかった二つとない可能性を実現へと導くのにさいして、知性は、ピラミッドの頂点から底面へと降るかのごとくに、単純にして不可分な統一からの分散によって、あるいは、高次の一性より低次の多性への移行によって、事をはこぶ。というのも、「感性」が受容した潜在的な諸表象は、未形成であるがゆえに渾然と浸透しあっているからである。

高次の一性から展開された判明なる多性もけっきょくは既成の諸観念、イメージに落ちつくが、それでも、ピラミッドの頂点を彩る二つとない（unique）独自性はかならずや底面にまで反響する。だが、このことはけっして、底面がただ一つ(unique)でしかありえないことを意味するものではない。なぜならば、「感性」をつうじて受けとられる可能性は、ひと通りの仕方では汲みつくせないほどに豊かであるからである。

３．道徳および宗教の領域における「感性」と知性の関係

上でみたように、『二源泉』においてベルクソンは、「感性」概念、わけてもその「知性－以上の」成分を論じるのにさいして、おもに芸術的もしくは文学的な創作の場面を参照する[18]。とはいえ、おなじく先にみたところにあるとおり[19]、ベルクソンが「感性」と知性の関係に論及しはじめるのは、道徳ないし

[18] 本節１－３．から２．にかけての議論を参照されたい。

[19] 本稿第１節を参照されたい。

宗教の領域における「感性」と意志の関係を論じるべき文脈で、これを引きあいにだすためであった。その意味では、ベルクソンにとって重要なのはむしろ、道徳ならびに宗教の領域において、「感性」を知性に働きかける能力として位置づけることであろう。この点にかんして、じつはベルクソン自身はあまり系統だった論述をおこなっていない。だが、個別的な事例に言及するいくつかの断片的な記述をみるかぎり、道徳ないし宗教の領域においても、「感性」と知性とのあいだに、芸術の領域におけるのと同型の関係が想定されていることは明らかである。その意味では、芸術的もしくは文学的な創作の場面にそくして概説的に論じられていたことが、道徳および宗教の領域において具体化されているという言い方もできるかもしれない。ここでは、その一例として、ソクラテスが古代ギリシアの道徳的思想にあたえた影響について述べられている箇所をみる[20]。

ソクラテスは存命中に、「自らは学説をもたらさず、何も書き残さなかった」(D.S. 59 : 1026)。それでいながら、彼はたしかに「ギリシアの偉大な哲学のすべてに霊感をふきこんだ」(*ibid.*) のであり、「ストア派もエピクロス派もキュニコス派も、ギリシアの道徳論者はすべてソクラテスを源流としている」(D.S. 61 : 1027)。そしてベルクソンは、ソクラテスという源流から流れでたという意味では代表的と言ってよかろう哲学者、プラトンの書き残したものについて、次のように述べる。

> プラトンの対話編のうちに見いだされる、魂とその起源、および、それが身体へ挿入されることにかかわる諸々の神話は、ある創造的な情動、ソクラテスの道徳上の教えに内在する情動を、プラトンの思想にそくした用語で書きとめる以外のことをしているだろうか。神話、ならびに、それらにたいし、交響曲がプログラムの曲目解説にたいするのと同様の関係にあるソクラテスの魂の状態が、プラトンの弁証法にくわえて保存されたのである (D.S. 61 : 1027-28) [。]

ここでは、プラトンの哲学史上の意義が、ソクラテスとの関係にてらして見さだめられている。プラトンの提出した学説、なかでもとくに魂の問題にかかわ

[20] ここでもやはり、「情動」という用語がとくに用いられる。この点については、本稿の前半部にあたる既出の拙稿「「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(1)」のなかの註26も、併せて参照されたい。

る「諸々の神話」は、「プログラムの曲目解説」が「交響曲」についてそうするように、「ソクラテスの道徳上の教えに内在する」「創造的な情動」を言語化したものに他ならない。ベルクソンはそう言うのである。

魂の問題にかかわるプラトンの神話は、厳密な意味においては道徳上の学説ではないかもしれない。だが、存命中に著述をおこなわなかった者から道徳に関連する「情動」を受けつぎ、これを複数の学説として開花させるという、ここで指摘されている一連の手続きは、芸術的ないし文学的な創作の場面にそくして言われていたこと、すなわち、「感性」をつうじて受けとられた未展開の可能性を、高次の一性から低次の多性への移行によって知性が実現へとみちびく手続きと、正確に符合する。著作を著さなかったソクラテスのもとで未形成のうちに渾然と相互浸透していた、道徳にかかわる諸々の潜在的な表象を、様々な神話というかたちで、プラトンが相互に判明なるものへ発展させたというわけである。

くわえて、「情動」と神話の関係が、交響曲と曲目解説とのあいだのそれになぞらえられている点にも、我々は注目せねばならない。すでにみたとおり[21]、実現されるべき可能性の豊かさゆえに、知性がピラミッドの頂点に複数の底面をあてがいうることを主張するさい、ベルクソンは、ある楽曲にかんして複数の批評、解説がひとしく並びたちうることとの類比に訴えていた。言葉づかいのうえでの類似性からして、ここでも同様のことが想定されていると考えるべきであろう。ようするに、ベルクソンにしたがうならば、道徳上の思想にかんするかぎりでソクラテスのはらんでいた可能性は、一つの学説によって汲みつくされるものではない。だからこそ、ベルクソンはプラトンのかたわらに、ストア派とエピクロス派のように、「正反対の原理」（D.S. 319 : 1230）を掲げているとさえ言えるものまで、ひとしくソクラテスに端を発する道徳論者として併記するのであろう[22]。

このようにベルクソンは、芸術や文学を論じたさいにとったのと同様の観点を、道徳や宗教の領域[23]にも、よりいっそう具体的な文脈において、適用している。

---

[21] 本節２－４．でみた引用文を参照されたい。

[22] ベルクソン自身の述べるところによれば、「ソクラテスの思想から、ソクラテスにおいては相補的であった相反する二つの方向をたどって、キュレネー派ならびにキュニコス派の学説が生まれ」、さらには、「それらがエピクロス派とストア派において、正反対の二つの原理へと拡張された」のである（D.S. 319 : 1230）。

第４節　「感性」の意志にたいする働きかけ

先述のとおり[24]、ベルクソンにしたがうとき、「感性」はすくなくともその一半において、知性とのあいだでとり結ばれるのと並行的な関係を、意志とのあいだでも成立させることになろう。換言すれば、「知性－以上の」情緒的状態から諸々の表象への発展と並行的な仕方で、ある種の情緒的状態から行為への発展が論じられるはずである[25]。とはいえ、この点について、ベルクソン自身は系統だった論述をおこなっていない。そこで、我々としては、上で得られた知見をふまえつつ、関連する記述を検討することによって、このことを検証したい。本節では、範例となる人物の摸倣による道徳的な振舞い、および、摸倣されるべき範例にあたる道徳上の偉人、わけても、最良の道徳家であるとベルクソンの考える神秘家の宗教的な振舞いに、それぞれかかわる記述をとりあげる。

１．道徳上の範例の摸倣

先にみたとおり[26]、道徳上の範例を摸倣する者の振舞いこそは、「感性」から意志への働きかけという問題をめぐって、ベルクソンが最初に論及する事例である。憧れの人物に倣って、あるいは、その人物の「呼びかけ」に応じて、一定の行為を実行にうつす者は、「情動」につき動かされて自ずと振舞うもので

[23] ここでは、もっぱら道徳の領域にかかわる議論をみた。だが、ベルクソンはたとえば、本文中でとりあげた文脈においていみじくも、古代ギリシアの様々な道徳論者が「ソクラテスの魂に」「学説という身体をあたえた」ことと類比的に、「福音書の精神」がさまざまなキリスト教の教義に「生命をふきこんだ」ことにも言及している（D.S. 61-62 : 1028）。そして、また別の個所では、ベルクソンは宗教の本質を何らかの「魂の状態（état d'âme）」にもとめたうえで、これが「身体をまとう」のにさしいては様々な選択肢がありうるだろうことを述べている（D.S. 286 : 1205-1206）。したがって、道徳の領域においてみられたのと同様のことが、宗教の領域についてもあてはまると言ってよい。

[24] 本稿第２節を参照されたい。

[25] この点については、以下の三つの拙稿もあわせて参照されたい。村上龍「創造性の伝播――ベルクソンにおける藝術的コミュニケーションの問題――」、『若手美学研究者フォーラム論文選』、2004年、18-27頁。村上龍「創造性の伝播――ベルクソン美学への一視座――」、『美学』、57巻１号（225号）、2006年、28-41頁。MURAKAMI Ryu, “Transmission of Creativity; An Essay on the Aesthetics of Henri Bergson,” *Aesthetics*, 13, 2009, pp. 45-57.

[26] 本稿第２節を参照されたい。

あることを、ベルクソンは述べていた。そのさいに問題となる「情動」は、「知性－以上の」それと並行的に、言うなれば「意志－以上の」と形容されるべきものなのであろうか。

以下の記述をみるにつけ、我々はこの並行性をたしかに指摘できる。

> この呼びかけの本性をよく知りえたのは、道徳上の偉大な人格を目のまえにした者だけであろう。だが、我々はだれしも、自らの習慣的な行為の格率では不十分だと思われるときに、あれこれの人ならばこのような場合にいかなる振舞いを自分に期待するだろうかと自問したことがあるはずである。それは親や友人であったかもしれず、そうだとすれば、我々は頭のなかで彼らを思いうかべていたわけである。しかしながら、それはいっさい面識がなく、ただその生涯について聞いたことがあるだけの人物でもありえただろうが、そうしたさいには、我々は非難されることをおそれ、称賛されることを誇らしく思いつつ、想像のうえで自身の行為をその人物の判断に委ねていたのである（D.S. 30 : 1003-1004）。

ここでは、範例的な人物からの「呼びかけ」に応じて一定の振舞いをえらびとる場面が、いわばそのミニマルな状況にそくして語られている。「道徳上の偉大な人格」の摸倣といったおおげさな状況をもちださずとも、我々は常日頃より、親や友人などの近しい人物、あるいは、「面識がなく、ただその生涯について聞いたことがあるだけの人物」なども含めて、いわゆる等身大の人物に倣って行動することがある。ベルクソンは、そうしたさいの我々の意志決定が、「あれこれの人ならばこのような場合にいかなる振舞いを自分に期待するだろうかと自問」したうえで下されるものだと言う。してみると、ある人物に倣うとは、じっさいに演じられた行為を繰りかえすことではかならずしもなく、むしろ、当該人物の行動原理を想定しながら、これにてらしてありうべき行為を実行にうつすことなのである[27]。

このようにベルクソンは、道徳上の摸倣というものを、すでに実現された行為の反復としてではなく、可能的な行為のあらたな実践として論じる。彼の考えるところでは、範例的な人物からの「呼びかけ」をうけて「情動」をかきた

[27] さらに付言するならば、本文中でみた引用文にひき続いてベルクソンの述べるところによれば、摸倣の対象となる範例的な人物は、「魂の根底から意識の光のもとにひき出される」ようにして「我々のうちに生まれた人格」でさえありうる（D.S. 30 : 1004）。

てられた者は、むしろそうした可能的な行為にこそ身を投じるのである。だとすれば、ここには、「感性」と知性の関係にかんして先にみたのと並行的な関係が、たしかにみとめられる。ようするに、「感性」は実現されるべき可能性を、潜在的な表象として受容するのと並行して、潜在的な行為としても受容する。したがって、「感性」は知性にたいするのと同様に、意志にたいしても働きかけるものであって、これをうけて意志が、「知性－以上の」情緒的状態から諸々の表象への展開と並行的に、「意志－以上の」とも形容されるべき情緒的状態[28]を諸々の行為に展開するのである。

２．行動人としての神秘家

同様のことは、神秘家の振舞いにかかわる記述についても指摘できる。「神秘主義が見神や激情､法悦でしかないと考える人々にとっては驚くべきことに、彼ら［神秘家たち］は偉大な行動人として現れる」（D.S. 101-102 : 1059）と述べるベルクソンにとって、神秘家とは、なにより「行動への嗜好[29]」（D.S. 241 : 1169）によって特徴づけられる存在である[30]。神秘主義にたいするこのような見方はベルクソン独自のものと言ってよかろうが[31]、それでは、偉大な行動

ここで言われる「人格」とは、我々各人のうちにひそむ人格上の傾向を意味するものと考えられようが、そうだとすれば、ベルクソンにとってはもはや、倣うべき人物の実在すら重要ではないということになる。道徳上の摸倣を可能的な行為のあらたな実現とみなす観点は、ここにいたっていっそう際だってくるだろう。

[28] ただし、ベルクソン自身は、「意志－以上の」という形容詞を用いてはいない。

[29] ベルクソンはこの「行動への嗜好」を「良識（bon sens）」とも換言しており（D.S. 109-110 : 1064-1065, 241 : 1169, 259 : 1183）、同様の用語法は『物質と記憶』や『笑い』（1900年）においてもみとめられる（M.M. 170 : 294, R. 140 : 475, 149 : 480）。本稿では、ベルクソンの「良識」概念にまで考察をひろげる余裕がない。この点にかかわる研究としては、中村弓子『受肉の詩学』（みすず書房、1995年）が挙げられる。

[30] 本文中でとりあげた以外にも、以下のような記述がみとめられる。「それ［完全な神秘主義］は行動である」（D.S. 238 : 1166）。「完全な神秘主義とは行動である」（D.S. 240 : 1167）。「偉大な行動人たちは［…］一般に行動人であった」（D.S. 259 : 1183）。

[31] このような観点を固めるうえで参考になった著作として、ベルクソンは以下の三点をあげている（D.S. 241 : 1168）。Henri Delacroix, *Etudes d'histoire et de psychologie du mysticisme*, Félix Alcan, 1908. Evelyn Underhill, *Mysticism*, Methuen, 1911. Evelyn Underhill, *The Mystic Way*, J.M. Dent, 1913. なお、このうちドラクロワの著作について、ベルクソンは1909年１月30日に道徳学政治学アカデミーにおいて報告をおこなっている。Cf. Mél. 788-790.

人たる神秘家の振舞いを、彼はどのように論じるのだろうか。

２－１．愛そのものとしての神

神秘主義とは「神との合一」（D.S. 244 : 1171）に他ならないから、ベルクソンにとっても、神秘家の行動は神の問題と相関的に論じられるべき事柄である。そこでまずは、神について論じられるところを手短かに確認しておこう。

ベルクソンは、神秘家たちの証言を手がかりに、「神の本質そのもの」を「愛」にもとめたうえで（D.S. 270 : 1191）、次のように述べる。

> 愛し愛されるべく運命づけられた存在が実存へと呼びだされた。というのも、創造のエネルギーは愛によって定義されねばならないからである。それら存在は、このエネルギーそのものである神とは区別されるものであるから、宇宙のなかに現れるより他なかったのであり、これこそが宇宙の出現した理由である（D.S. 273 : 1194）。

ここでは、世界の創生が、神を「愛によって定義」する観点から論じられている。神は愛そのものであるから、自らとのあいだに「愛し愛される」関係をとり結ぶべき存在として人類を創造し、またそれに付随して、彼らが生きる場所である「宇宙」をも創造した[32]。ベルクソンはこのように、自身の愛に値する者たちを産みおとすものとして、神を規定するのである。

２－２．未完の神的創造の継続

上述のように、神が自らの愛に値する者を産みおとすのだとして、しかしながら、ベルクソンによれば、「我々の惑星においては、他のすべての種の存在理由である種［人類］は部分的にしかそれ自身でない」（D.S. 273 : 1194）。す

[32] なお、この考えかたにしたがうかぎり、全宇宙にわたって、あるいは、すくなくとも地球上では、ただ独り人類だけが存在理由を十全に有することになる。じっさい、本文中でみた引用文にひき続いて、ベルクソンは次のように述べている。「宇宙の一角を占める我々の惑星においては、いや、おそらく我らが太陽系の全体においても［…］この種［人類］は他の多くの種を必要としたのであり、それらがかの種を準備し、支え、あるいは、そのためのつぶしとなったのである」（D.S. 273 : 1194）。

くなくともこの地球上では、神的な創造はなお未完成であり、人類もいまだ十全には神の愛に値する者たりえていないというわけである。

偉大な行動人たる神秘家に一定の役割が割りあてられるのは、まさにこのことのゆえである。ベルクソンは、神秘家が「すべての人にたいする神の愛」によってその魂を「焼きつく」されることに言及したうえで（D.S. 247 : 1173）、次のように述べる。

> 自らの作品にたいする神の愛と、すなわち、万物を創りだした愛と合致しているので［…］それ［神秘家の愛］は、神の助けをかりて人類種の創造を完成し、人類を、人間自身が手をかすことなく決定的に創られえたとしたら直ちにそうなっていたであろうものにしようとするだろう（D.S. 248 : 1174）。

ここでは、神秘家がいかなる行動に身を投じるのかが語られている。上でふれたとおり、ベルクソンにしたがうならば、神の愛に値する者を産みださんとする神的な創造は、いまなお未完成にとどまる。したがって、「神の愛」を受けついだ神秘家が、「人類を」「決定的に創られえたとしたら直ちにそうなっていたであろうものに」するために、つまりは、いまだ実現されざるものの実現にむけて、行動するのだとベルクソンは言うのである[33]。

ベルクソンはこのように、神秘主義の本質を、とくに「人間の意志と神の意志との一体化」（D.S. 242 : 1170）にもとめる[34]。ベルクソンにとって、神秘家とは、愛という名の「創造的情動」（D.S. 97 : 1056, 271 : 1192）を受けついだがゆえに、いわば神の「道具[35]」（D.S. 245 : 1172, 251 : 1176, 332 : 1240）となっ

---

[33] ベルクソンは、このような行動指向の神秘主義、すなわち、彼が完全なものとみなす神秘主義を、キリスト教神秘家においてしかみとめない。具体的には、そこに数えいれられるのは「聖パウロ、聖テレサ、シエナの聖カテリナ、聖フランシスコ、ジャンヌ＝ダルク」（D.S. 241 : 1168）といった名前である。また、ベルクソンの考えるところでは、イエスもまた一人の、しかも究極の、神秘家である（D.S. 254-255 : 1178-1179）。

[34] この他にも、「人間の意志が神の意志と混じりあう」（D.S. 234 : 1163）、「魂の自由が神の活動と合致している」（D.S. 246 : 1172）などの記述がみとめられる。

[35] なお、『二源泉』公刊の18年前、1916年にマドリッドでおこなわれた講演でも、ベルクソンは神秘家を神の「道具」と形容したようである。Cf. Mél. 1233.ただし、この講演にかんしては、ベルクソン自身の手になる原稿が残されておらず、我々は、スペインの雑誌記者がしたためた速記からその概要をうかがい知るばかりである。

て、いまだ完遂されざる「神の活動を継続し、延ばす」（D.S. 233 : 1162）べく行動する、そのような存在なのである。だとすれば、我々はここでもやはり、「感性」と知性の関係にかんして先にみたのと並行的な関係をみとめることができる。ようするに、ここでも、「感性」をつうじて受けとられた未展開の可能性が、自ずと意志によって展開されるのである[36]。「働きかけると同時に「働きかけられる」」（D.S. 246 : 1172）存在として、すなわち、「神にたいしては受動者、人々にたいしては能動者たる、神の協働者[37]」（D.S. 246, 1173）として神秘家を位置づけるベルクソン独自の観点は、「感性」を受動的かつ能動的な能力とみなす、おなじくベルクソン独自の観点によって裏うちされているのである。

本稿での考察をつうじ、我々は、「感性」をめぐるベルクソンの、哲学的キャリアの晩期における思想について、系統だった理解に達した。

第一に、ベルクソンにとって、「感性」とは、「感情」や「情動」をその主たる外延とする概念であるが、ただし、ここには「感覚」は包摂されない。というのも、「感覚」が物理的な刺激に由来する情緒的状態であるのにたいして、「感情」や「情動」については、おなじく情緒性によって規定されるものでありながら、事情がまったくことなるからである。

第二に、ベルクソンにとって、「感性」は、「高次の」と形容されるべき成分と「低次の」と形容されるべきそれとに二分される[38]。

---

[36] なお、付言するならば、神秘家各人がそれぞれに「独自性を有している」（D.S. 261 : 1184-1185）ことを折にふれて強調するベルクソンは、そのことと関連して、神秘家のやどす愛が「彼ら各人のうちでまったく新しい情動である」点にも言及している（D.S. 102 : 1059）。ひとしく神から受けつがれたものでありながら、神秘家各人はそれぞれに固有の愛をやどすというわけである。これは、「感性」と知性の関係にかんしてみたことと並行的に、以下のことを意味するものと考えられよう。すなわち、神秘家各人が神から託される実現すべき可能性は、それぞれに二つとない独自性をそなえていること、ならびに、その可能性は一とおりの仕方では汲みくみつくされない豊かさをたたえていること。

[37] ベルクソン著作集の編者アンドレ・ロビネによれば、この「神の協働者」という表現は、聖パウロ『コリント人への手紙』に由来する。Cf. D.S. 1572.

[38] ここまでみてきたところから明らかなように、「感性」概念をめぐって、「高次の」ないし「低次の」成分という用語を、ベルクソン自身が用いるわけではない。しかしながら、「知性－以上の」情緒的状態を、そこから発展しゆく諸々の表象との関係にてらして、ベルクソンは「高次の」と形容していた。ここでは便宜上、「知性－以上の」情緒的状態、および、それとの並行性から「意志－以上の」とも形容されよう情緒的状態、これらに

第三に、ベルクソンにとって、「感性」とは、その「低次の」と形容されるべき成分においては、現実的な[39]表象から付随的に情緒上の効果を被る、そのかぎりで受動的な能力である[40]。

第四に、ベルクソンにとって、「感性」とは、その「高次の」と形容されるべき成分においては、いまだ実現されることのなかった二つとない可能性を受容する、そのかぎりで受動的な能力であると同時に、受けとられた可能性の実現にむけて知性ならびに意志に働きかける、そのかぎりで能動的な能力でもある。ここで言われる未展開の可能性とは、未形成であるがゆえに、生命体にも比せられよう仕方で渾然と浸透しあう、潜在的な諸々の表象もしくは行為である。したがって、「感性」からの働きかけをうけた知性ならびに意志は、ピラミッドの頂点から底面へと降るかのごとくに、渾然たる一性より判明なる多性への移行によって、あるいは、単純にして不可分な統一からの分散によって、事をはこぶ。そのさい、実現すべき可能性の二つとない（unique）独自性はかならずやピラミッドの底面にまで反響するが、それは底面がただ一つ（unique）でしかありえないことを意味しない。なぜならば、「感性」が諸々の潜在的な表象ないし行為として受けとる可能性は、一とおりの仕方では汲みつくせないほどに豊かだからである。このように、ベルクソンは「感性」を、とくにその「高次の」と形容されるべき成分にかんして、やがて判明な多性へと展開されるであろう、そのような一性の受容によって規定しつつ、ある意味では、知情意のトリアーデのうちで「感性」を最上位に位置づける。

そして第五に、以上のような考えかたは、同時代の思想的環境に鑑みた場合、「感性」概念の外延にかんする「感覚」の除外と「情動」という用語の重用、それから、「情動」という用語を多用しつつなされる、一と多の対概念をつうじた「感性」の「高次の」と形容されるべき成分への着眼という二点において、独自性を有する。

かかわる「感性」の成分を「高次の」と、そして、残りの成分を「低次の」と、それぞれ形容することにする。

[39] ここでは、「感性」の「高次の」と形容されるべき成分にかんして問題となる、表象もしくは行為の可能性、潜在性と対比的に、現実性という用語を用いることにする。

[40] なお、ベルクソン自身の言及するところではないが、「感性」が知性ならびに意志とのあいだでとり結ぶ二つの関係の並行性に鑑みれば、「感性」の「低次の」と形容されるべき成分をめぐり、現実的な表象に付随する情緒上の効果と相並んで、現実的な行為からこうむる情緒上の効果を想定することも、あるいは可能かもしれない。

凡例

ベルクソンの著作からの引用は*Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991（1959[1re]）に拠り、以下の略号とともに、単行本、著作集の順に頁数を（　）内に記す。

M.M. : *Matière et Mémoire*, P.U.F., 2008（1896[1re]）.

R. : *Le Rire*, P.U.F., 2007（1900[1re]）.

E.S. : *L'énergie spirituelle*, P.U.F., 2009（1919[1re]）.

D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008（1932[1re]）.

上記に未収録のものは *Mélanges,* textes publiés et annotés par André Robinet, P.U.F., 1972に拠り、同じく略号（Mél.）と共に頁数を（　）内に記す。